

國學院大學學術情報リポジトリ

主観的情意提示の擬似連用成分：

このような語群のこのような働きは、どう呼んで取り扱われてきたか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 幸弘, Nakamura, Yukihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000747

主観的情意提示の擬似連用成分

—このような語群のこのような働きは、どう呼んで取り扱われてきたか—

中村幸弘

今では、そういう語群にそういう働きが見られること、広く知られているところである。ただ、それぞれに多様な呼称で取り扱われてきていて、その語群のその働きがどうしてそう呼ばれるのか、時に戸惑うこともあった。

たまたま、そのうちの一例については、遠い昔、「苦しくも降り来る雨か」との、確かな出会いがあった。その用例から、同じ語群の同じ働きが見えてきた。シク活用形容詞連用形が係助詞「も」を伴っていて、直下の動詞を修飾していかないことが明らかだった。

しばらくして、シク活用形容詞連用形だけで、「も」を伴

わない用例にも、同じ働きのある用例が存在することを知らず、どうして「も」がなくても同じように機能するのか、悩まされた。そのうち、ウ音便化用例にも、限られた副詞にも、共通する働きが感じとれるようになった。いや何名かの先学の著作から教えていただいた。

長い時間が経過して、「苦しくも」の現代語訳「困ったこと」の「…ことに」が、どういう過程を経て成立したのか、それが捉えられないことに苛立ちを覚えた日があった。恥ずかしいことに、その苛立ちは、現在も続いている。小稿は、魯鈍な国語科教員の告白である。

一 万葉の「苦しくも降りくる雨か」と竹取の「嬉しくものたまふものかな」と

本歌取り歌「駒とめて袖うちほらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮」(新古今・6(冬)六七一／藤原定家朝臣)の本歌として、その万葉歌と出会うことになった。初任校での二回りの二年生担当教材だった。用例引用は、以下、すべて小学館・新全集本を借りることとする。

(1) 苦しくも降り来る雨か三輪の崎狭野の渡りに家もあらなく
 に(万葉・3二六五／長忌寸奥麻呂)
 その初句「苦しくも」について、同僚としての三教諭から、それぞれに教えていただいた。教科会議が終わって解散する直前に、同じ教材を担当していた三歳年長のS教諭が、時枝誠記『古典解釈のための日本文法』を机上に置く中年のK教諭に、そこをどう読解したらよいか、尋ねてくれたのである。筆者が依頼したわけでも、誰かが依頼したわけでもない。S教諭は、時枝の著書のなかにその一首が引かれていることを前提に、その用例を時枝が引いた裏話などが聞けたらということではなかったかと思う。すると、時枝文法は知らないがと前置きして、

小学校の代用教員から文検に合格して旧制の中等教員になったと聞くI教諭が、その「苦し」は「辛い」意で奥麻呂が「辛いこと」と言っているのだろうかと思ねるように発言してしまい、K教諭は、そうですとねと応じて、時枝文法は感じるものではない、と呟かれた。その科会はそれで終わった。

そのころ、岩波の大系本が次々と刊行されていた。放課後、部活指導に行く前に、珍しく図書室に立ち寄って、その大系本『万葉集』(高木市之助・五味智英・大野晋校注・昭和三十二年(1957)年)のそこを開いた。【大意】に「こまつたことに降って来た雨だ。」とあった。米農家の傍ら勤務するI老教諭が、今でも万葉の奥麻呂と重なって見えてくるのである。

その数日後のうちに、同じような表現に出会っていたことに気づいたようである。初年度担当した『竹取物語』のなかの用例である。続いて、『大鏡』のなかの用例も結びついた。

(2) 翁「嬉しくものたまふものかな」といふ。(竹取・五人の貴公子)

(3) 貴公子「…あはれにうれしくも会ひ申したるかな。…」と言へば、…。(大鏡・序)

大系本『竹取物語 伊勢物語 大和物語』(昭和三十二年(1957)年)に収められる『竹取物語』(阪倉篤義校注)は、

そこを「嬉しいことをおっしゃって下さるなあ。」としていた。あの碩学も、ここは不合格だった。ただ一冊本の参考書として用いていた三谷栄一『竹取物語評解』（昭和二十三（1948）年）^③は、「まあうれしくもいつて下さいましたぞ」と訳していた。その「まあ」が、その働きを訳出したものと理解できるのは、なおしばらくしてからだが、爾來定着して現在に至っている。

『大鏡』は、その「うれしくも」の上の「あはれに」も含めて、注目する表現と見るかどうかにも悩まされたが、その後しばらくして含めて取り扱うのが適切と判断できて現在に至っている。さて、大系本『大鏡』（松村博司校注・昭和三十五（1960）年）は、まだ刊行されていなかった。到着を待って確認したが、施注されていなかった。後に注目する「も」を伴わない「うれしく」が後続するのだが、そこにも施注はなかった。

さて、あの万葉歌だが、定家が三輪の崎の狭野の周辺には雨宿りする人家もないと解して、雨ならぬ雪降りつる佐野で難渋する本歌取り歌となった、という学習で終わった。新古今歌の本歌取り以上に生徒たちが関心を寄せたのは、その余談だった。その定家歌が、佐野源左衛門常世の、雪の夜、旅僧に身を寢した北条時頼を家に泊め、秘蔵の鉢の木を焚いて饗応し、いざ鎌倉という時の覚悟を語る、あの謡曲「鉢の木」となる、と

いう余話である。筆者としても、教授資料からいただいた知識であった。

二 時枝『古典解釈のための日本文法』と橘・慶野

『文法詳説 要語解説 大鏡通釈』などと

進路指導にも熱心なS教諭は、K教諭にその時枝著書での課外授業を勧め、K教諭は、説明する文法ではないと言い添えながら無学年での数人の生徒たちと勉強会を開いていた。K教諭の、その眩きをそれとなく聞いて、筆者も、時枝のその文法は感じとる文法で、その一冊は、読みとった結果を整理した記録、と受けとめたようである。

「苦しくも」歌を引く単元八は連用形の用法^(二)で、「述語格を保持しながら修飾語となる連用形」というサブタイトルである。源氏から三用例、枕から一用例を引いてそれぞれに解説を施し、棒線で仕切って、また、源氏から八用例、枕から一用例、最後に、その「苦しくも」歌が引かれている。そこには、短い解説がある。

「苦しくも」は、前例と同様に、「我が苦しくも」の意である。この場合、「はげしくも降り来る雨か」と比較すれば、

その相違が明らかであらう。(35ページ)

まさに感じとる文法で、その解説も、感じとらせるための比較という作業を読者に課していた。

さて、あのI老教諭は、どうしてあのように鮮やかに読み解けたのであろうか。『大鏡』『徒然草』の逸話が反射的に出てくる方だった。遠からず副業教員となる筆者には、生き方の先達だった。それとなく、刊行されて間もない橋純一・慶野正次【文法解説 要語解説】『大鏡通釈』の存在を知ることになった。そして、大系本では得られなかった読解の手引きを頂戴することができた。

11うれしくも「うれしく」は形容詞の副詞形。このように、副詞や副詞形の下に「も」がつくと、その文の述語（あひ申し）の部をひとまとめにしてそれ全体に係る。すなわちここは、「あひ申しでうれし」の意。「通釈」文に注意。

（詳解編2ページ上）

その11は、同書の注番号である。副詞に「も」が付くとあって、具体的用例が見えてこなくて少しく悩まされたが、その通釈には「あなたにおあいできまして、まあほんとうにうれしいことでございますよ。」とあって、I老教諭の読解力は、この系統の書物から得られたものであろうと思えてきた。

初任高校で二度めの卒業生を送って、母が一人で営む履物仲

卸し・小売り）商見習いを兼ねて、町立が県立に移管された漁師町の校舎で教務主任と日教組青年部と生活指導と部活との、夜業には雪駄の鼻緒を挿げる職人としての、一日二十五時間の日々となった。消防団と裸祭りの寄り合いも、決して嫌ではなかった。

その実家で結婚、長男出生直後、お断りできない命令のような依頼があつて、数年のつもりで町の学校に割愛申請して上京、書物にゆつくり出会える環境に恵まれて、橋純一『大鏡新講』武蔵野書院・昭和二十九（1954）年）を、何かのついでに覗いていた。その「通釈」に「あなた様にお逢いできまして、まあほんとうに嬉しい事でございますよ。」とあって、その「まあ」が、その日、この表現の訳語として定着した。

三 枕草子「あさましう、犬なども、かかる心あるものなりけり」など

(4) 「あさましう、犬などもかかる心あるものなりけり」と笑はせたまふ。(枕草子・七)

猫に乳母をつけたと『小右記』までが書き残す、その話に関連しての翁丸という犬の話である。忠隆などに打たれながらも

帰ってきた翁丸を見て、皇后定子がおっしゃったお言葉である。

(5) 御達ごたちなどは、「あやしくにはかなる猫のときめくかな。かやうなるもの見入れたまはぬ御心」と咎とがめけり。(源氏・若菜下)

柏木の身辺に仕える年配女房は、柏木の挙動を不審がついて。柏木は、その唐猫を女三の宮の形代として愛撫している。

(6) 「…かへすがへすうれしく対面たいめんしたるかな。…」と言へば、…。(大鏡・序)

用例(3)と同一会話文のなかに見る用例である。そこに、橘・慶野前引書は、「この「うれしく」は「うれしく(も)」の「も」の省略形で、結局「対面してかへすがへすうれし」の意。」と施注している。

さらに、その後暫くして、山本俊英「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」(「国語学」二三輯・昭和三十(一九五五)年)を十数年遅れて読む機会を得た。この間、全く記憶から遠のいていたその表現がシク活用形容詞によって蘇り、その情意性と結びついて定着したようである。

四 この表現の、シク活用形容詞連用形に下接する「も」の働き

時枝と橘と慶野とによって幾らか見えてきた、その表現の「も」について、橘・慶野は、その「も」に注目して、「も」を伴わない用例については、これを省略として取り扱っていた。

その「も」は、「…も…か」の「も」と見てよいであろう。「苦しくも」歌から、直ちにそう思えてくる。「嬉しくものたまふものかな」からは、「…も…かな」の「も」といつてもよい。上代語「か」も中古語「かな」も詠嘆の終助詞で、それぞれ表現形式として定着している。その「…も…か」については、次の(A)・(B)が認識されている。

(A) 山方やまがたに蒔まける青菜あおなも吉備人きびびとと共にし摘とめばた楽しくたのもあるか(古事記・歌謡54)

(B) 三輪山さんりんを然しかも隠かくすか雲くもだにも心あらかなも隠かくさふべしや(万葉・118)

(A)は補助・被補助の関係であり、(B)は連用修飾・被修飾の関係である。用例(1)は、そのいずれでもない。また、「か」と同じ働きの「かな」を用いた用例(2)・(3)についても、(A)・(B)のい

ずれでもない。

右の確認で、時枝が「苦しくも」などを修飾語となる連用形とするのは、読解の早い段階では避けておきたいように思えてくる。むしろ、そこで切れて、別の視点から「降り来る雨か」と描写しているものと見たいように思えてくるのである。ただ、「…も…か」という表現形式が一定の定着を見せていたところから、そのように詠嘆の終助詞「か」を文末とする「降り来る雨か」となってしまうものと見たいように思えてくるのである。つまり、「苦しくも」は、「苦しくもあるか」の「あるか」の省略形で、それと直接しない「降り来る雨」が、「…も…か」の表現形式に惹かれて、「降り来る雨か」となったものと見えてくるのである。「嬉しくものたまふものかな」「うれしくも会ひ申したるかな」についても、全く同じ推論が成立するのである。「も」を省略した用例(5)・(6)も、その文末は、「かな」であつて、右に準じて考えられる。用例(4)も、詠嘆性の「けり」が文末語となっている。推移の過程が、それぞれに見えてくるのである。飛躍はあるが、その「も」は、「…も…か」「…も…かな」の「も」としか考えられない。そう思ったりして、ここで長い時間が経過した。

五 この表現の、副詞や副詞形の下に「も」が付く用例

橘・慶野前引書は、この表現について「副詞や副詞形の下に「も」がつくと、」といっていたが、それは、副詞と副詞形が下に「も」を付けると、ということだった。ともかく、これを手掛かりに該当用例を検出したと思った日があつた。ここで、その作業を阻んだのが、「も」を伴うことのない「げに」の存在であつた。

(7) …、このかぐや姫、きと影になりぬ。はかなく口惜しと思して、げにただ人にはあらざりけりと思して、…。(竹取・帝、かぐや姫に会いに行く)

その「げに」は、帝の心内文の文頭であり、その文末は、「かな」に通う、気づきの「けり」となっている。思っていたとおりで納得できたことに、というのが、その「げに」である。ここで、また、長い時間が経過した。

そうこうするうちに、次節に紹介する北原保雄『表現文法の方法』に載る、その一覧を見ってしまうことになる。直ちに、ここにはない用例の存在に気づいて、あそこにあつたと確認した、

その用例を以下に紹介する。

形容詞副詞形（＝連用形）が「も」を付けた用例は、ク活用にも見られた。「畏くも」と、その現代語「恐れ多くも」が、それである。また、類義の「かたじけなくも」も、この表現のこの働きである。当時の筆者の小さな発掘である。

(8) かしこくも古りたまへるかなと思へど、。(源氏・朝顔)
この用例も源氏の心内文の文頭で、その文末は詠嘆の「かな」である。ただ、その連用形は、筆者が連用修飾とは認めたくない連用形である。

形容動詞の連用形に「も」が付いた用例としては、現代語「無残にも」が見つかった。引き続き、小さな発掘だった。

(9) 人間のなかから無残にもあらゆるものをあばきたてる軍隊、。(野間宏・真空地帯)

「無残なことに」に言い換えられよう。また、たまたま、「あはれに」が「をかし」を始め、多くの形容詞と連続して用いられることを江沢潤子「源氏物語の「あはれ」の一用法に就いて」(「解釈」八・昭和五十五(1980)年)などから知り、広く中古の文章では多く見られることも確認して、あの用例(3)の「あはれに」は、続く「うれしくも」と一まとまりにして、この働きのこの表現であると見ることにした日もあった。用例

(3)が(3)になった日である。

(3) 貴族「あはれにうれしくも会ひ申したるかな。…」と言へば、。(大鏡・序)

六 北原の時枝文法考察とその著作に見るこの表現

この働きのシク活用形容詞の現代語用例は、文頭の「珍しく」である。日本語の世界6としての北原保雄『日本語の文法』(中央公論社・昭和五十六(1981)年)を通読していて、その第四章(補充成分と修飾成分の陳述修飾成分)のなかで、修飾成分の有する概念について「客観的概念 客観・主観の両面的概念——主観的概念」として、その主観的概念に該当する語に「珍しく・確かに・もちろんナド」が引かれていた。その「も」を伴わない「珍しく」などが、筆者が長く引き摺っていた例の表現の例の働きと結びついた。さらに、第九章(客体的表現と主体的表現)において、その表現に「うまいことに」を加えて、それが、「苦しくも」の訳「困ったことに」と結びついた。そこにいる主観的判断による主観的表現が、例の表現の例の働きの働きなのである。

北原『表現文法の方法』のI(現代語の表現と文法)のうち

の(注釈修飾成分と表現)において、「珍しく」「もちろん」「確かに」「残念なことに」を文頭やそれに準じる位置に置いた用例文を引いて、この表現を注釈的用例表現と呼んでいる。そのうえで、その成分を八分類して紹介している。

①注釈的な概念を有する副詞(もちろん、むろん、当然、幸い、あいにく)

②注釈的な概念を有する形容詞の連用形(珍しく)

③注釈的な概念を有する形容動詞の連用形(確かに、幸いに、不思議に、本当に、見事に)

④形容詞の連用形に「も」の付いた形(惜しくも、嬉しくも、早くも、よくも、折悪しくも)

⑤形容動詞の連用形に「も」の付いた形(幸いにも、不思議にも、残念にも、無念にも、都合にも)

⑥形容詞の連体形に「ことに」が付いた形(うまいことに、いいことに、惜しいことに、悪いことに、つらいことに、嬉しいことに、面白いことに、とんでもないことに)

⑦形容動詞の連体形に「ことに」が付いた形(幸せなことに、不幸なことに、残念なことに、嫌なことに、都合なことに、不思議なことに)

⑧動詞・形容詞・形容動詞の連用形に「たことに」が付いた形

(困ったことに、弱ったことに、よかったことに、嬉しかったことに、幸せだったことに)

この表現も、見える人には見えていたのである。その働きは、注釈と呼ぶことになるのか、と思った。

七 増淵「北原文法に学ぶ」が契機となって再読し

た渡辺『国語構文論』の誘導

時枝・増淵恒吉『古典の解釈文法』^⑥は、時枝『古典解釈のための日本文法』の高校生向け教科書である。都の指導主事を経て、研究者の世界にも迎えられた増淵は、北原『日本語文法の焦点』(教育出版・昭和五十六(1984)年)の末尾に、「北原文法に学ぶ」と題した論考を寄せている。補充成分と区別された連用修飾成分の内訳として(e)(陳述修飾成分)を取り上げたなかで、「珍しく雪が降った。」の「珍しく」について、「四月に雪が降ったのは珍しい。」と言い換えることができる、としている。この読解は、あの橋「大鏡新講」に見たところである。人は気づかずに先学の教えを引き継いでいるのである。

そこで増淵は、渡辺実『国語構文論』^⑦が誘導成分という成分を設けていて、実際の読解指導に役立てることの可能な理論だ

といっていた。同上書については、久しい以前に通読していたが、そこまで受けとめてはいなかった。増淵のいうように、そこが認識できていなかったことが独り恥ずかしかった。

そこには、「もちろん」「あいにく」「確かに」、そして、「珍しく」も引かれていた。さらには「ええ、」「もちろん原書を読む。」を「原書を読むのはもちろんだ。」と言い換えてもいた。注釈対象としての「原書を読む」に注釈「もちろん」が先行して誘導していたのである。

八 拙共著『古典文の構造』における碁石命名の主観標示

検定教科書編集に関わっていた縁で、碁石雅利との共著『古典文の構造』⁸⁾を刊行することになった。第二章(複雑な文の構造を整理する)の【四】(特殊な文の構造について学ぶ)の④(主観標示の構文)として、小稿の用例(4)をまず引いて解説し、以下、「なほ」「げに」の用例を枕と源氏から引いてある。脚注欄には、「(主観的判断)という見出しをつけて、現代語「あいにく」「うまく」の用例を引いて解説してある。練習問題には、傍線を付した「あやしく」「論なく」「くちをしう」「さかしう」から、

その判断の対象となる部分を抜き出させる設問と、主観的判断を表す形容詞連用形や副詞を抜き出させる設問とを配してある。すべて碁石の労作で、北原の著作にいう、「主観的判断」を承けて、それが文頭にあるところから、「主観標示の構文」と命名したのである。練習問題十用例の出典は、源氏から四用例、枕から二用例、蜻蛉・更級から各一用例、古今から一用例、平家から一用例で、北原のいう主観的判断を十分に読み解いて用例発掘に努めた成果である。

九 北原の注釈修飾成分を承けての拙共著『古典語の構文』の評価を表す構文

既に六において引いた北原『表現文法の方法』においては、この表現のこの働きを注釈的成分と呼んで取り扱っていた。その注釈的成分は、表現主体の注釈や評価を修飾内容とするものである。例の「珍しく」「もちろん」「確かに」「残念なこと」である。その副詞については、その後、坂梨隆⁹⁾が、北原他編『日本文法事典』において評価の副詞と呼んでいる。

その直後という印象で、「日本語学」(昭和五十八(1983)年三月号)に載る鈴木泰「中古における評価性の連用修飾につ

いて¹⁰⁾」を読むことができた。渡辺『国語構文論』の、まさにその誘導という術語を受けての用例発掘と紹介とであった。今昔物語集に見える漢語形容動詞の該当用例を引き解説、その後言語幹としての漢語だけを列挙、評価性を有するものと有しないものとを判別している。次いで、並列関係の和語形容詞形容動詞を観察するなかで評価性を確認し、以下、形容詞形容動詞語幹を列挙、評価性を有するか否かの判別をしているが、ここで意味するところがよく読み取れないままとなっている。注目したいのは、漢語形容動詞の連体形にも、評価性を認めている点である。

- (10) 奇異ニ日ヲ不_レ違ズ来タルカナ。(16一八)
 (11) 此レ奇異ノ無慙ナル事也。(4三)

用例(10)は、他の文の成分との関係を絶って文頭に提示しているが、(11)は、そうではない。そこで、その列記しての(11)は、形態は連体格であっても連体修飾となっていない用例ということなのだろうか。なお、時代を中古としておきながら、そこに「嬉しくも」のような「も」を伴った用例についてまったく触れていないことが残念だった。

機会あって、再び基石との共著『古典語の構文¹¹⁾』を刊行することとなった。ここでは、この表現のこの働きを評価の構文と

呼ぶことになった。例の、翁丸のことをいう「あさましう、犬などもかかる心あるものなりけり。」は、「犬などもかかる心あるものなりける〔コト〕〔ガ〕、あさまし。」を逆転させて、評価を文頭に標示した表現であると解説することとなった。

同書では、さらに評価を表す文型を整理することとなった。また、出典として、今昔から七用例、発掘し紹介することとなった。うち、三用例ほど、引くこととする。

- (12) 僧正「怪シク、助泥ガ破子ノ遅カナ」ト思給ケル程ニ、(今昔・28九)
 (13) 女「哀レニ此クマデ思給ケル事」(今昔・30七)
 (14) 仁浄：「糸辛ク、此ナム八重ニ被云タル」ト語りケレバ、(今昔・28七)

用例(12)は心内文であるが、使用テキストがカギ括弧を付けてくれてあったところから、直ちにそれと見えてこよう。(13)の「哀レニ」は、その「哀」字が読解を妨げるが、そのまま引いた。

その「事」は終助詞化しており、文末の「…ケル事」で感動文化していよう。(14)の、その評価語は、副詞「いと」を含めた「いとからく」で、ク活用だが情意を表している。もちろん、同書には、カタカナをひらがなにするなど、表記を現行の標準に従って改めてある。

その後、また機会あつて、中村・碁石『日本古典 文・和歌・文章の構造』(新典社・平成二十四(2012)年)を刊行、その第三章の【四】にも⁵⁾(評価を表す構文)として立項した。殊にそこでは、評価と呼ぶ事情について、好悪・正邪・運不運・適不適など、事態に対する主観的価値判断をいうところからの呼称であることを闡明した。北原のいう評価という術語をそのまま頂戴した。

十 小田『古典文法詳説』^{【実例】}『古典文法総覧』にいう評価誘導

小田勝『古典文法詳説』¹⁶⁾は、この表現のこの働きを「評価誘導」と呼んで取り扱うことになる。北原が注釈とも評価とも呼んだ表現を評価として受けとめ、さらに渡辺がその表現を誘導と呼んだ、その誘導を組み合わせて、評価誘導として、その表現と述語との関係を認識させようとした、と見てよいであろうか。渡辺は、批評の誘導とはいっているが、評価誘導ではない。ここで注目したいのは、同書が引く連体形の評価誘導と形容詞語幹が接尾辞「さ」を伴って係助詞「は」を添えた評価誘導とである。理解しやすく、適宜補って引くこととする。

(15) 此かやう様ノ者ものノ人謀ひとばかラムト為ル程ほどニ、由よじ無なキ命いのちヲ亡ほろス也。(今昔・
29 三四)

(16) 例の入道殿は、まことにすさまじからずもてなし聞こえさせたまへるかひありて、憎さは、めでたくこそ〔和歌ノ序代ヲ〕書かせたまへりけれ。(大鏡・道隆)

右の(15)は、連用形「由無く」が続く体言「命」に惹かれて連体形「由無き」になつたかにも思えようか。この働きの連用形が連用修飾機能を有していなかつたところから、そもそも不安定だったのである。そして、あの、九で見えてきた、「日本語学」に載つていた鈴木論文に見た「奇異の」と通うような用例ということになるのであろうか。続く(16)は、その「は」に提題性があるからか、その折の語り手世次の伊周に対する印象を咬いた声とも聞こえてこよう。

小田は、その後、同右書に補訂を加えて、『^{【実例】}古典文法総覧』(和泉書院・平成二十七(2015)年)として刊行する。そこには、新たに感嘆文中の「も」が立項されていて、「苦しくも」歌が引かれている。「…も…か」という表現形式として注目しているが、それ以上の説明はない。小稿の四に関係する問題である。

十一 この表現のこの働きは、注釈か評価か誘導か
評価誘導か、はたまた、主観標示か

この表現を、北原は、文の成分として注釈的成分と呼んだ。したがって、その働きは、注釈と見たことになる。

その注釈成分は、その働きを注釈だけでなく、評価でもあると見た。その評価という働きをほうを取り上げて、碁石は、その構文を「評価を表す構文」と呼んだ。中村も、それに従った。そのような働きの副詞を、坂梨も、「評価の副詞」と呼んでいた。鈴木も、渡辺の誘導を受けた小田も、「評価性の連用修飾」と呼んでいた。ただ、当時、「評価」の語義が〈価値を認めること〉

の意に多くの用例を見せるようになってきていた折から、誤解を与えまいかと、中村には不安に思うところもあった。「うれしくも」の一方に「苦しくも」もあるのである。運不運ともいえようが、不運の用例のほうを多く見るのである。

それらよりも早く、渡辺は、このような表現のこのような働きを誘導と呼んでいた。それよりも古くに、その表現に一定の関心を寄せていたのに、そして、渡辺のこの著作を通読していたのに、記憶にとどめることができていなかった。その後、増

淵の論考が契機となって再読した。

さらに、その後、小田が、このような表現のこのような働きを評価誘導と呼んでいることに気づいた。評価への誘導を意味する評価誘導かと解した。

中村としては、古くに碁石がそう呼んだ主観標示に、なお未練を残していた。確かにその主観標示は、働きをいう術語ではない。私かに、主観の前置きなども眩していた。時枝文法は知らないと言つて、時枝の読解と一致する読解をしていた、あの I 老教諭が中村にそう感じさせているのであるうか。

十二 時枝文法で読み解く全集・新全集『古今和歌集』(小沢正夫) 三十四番歌の施注

昭和四十六年に刊行された全集『古今和歌集』¹³解説の五(研究史の概要)のなかには、その語学的読解の姿勢が、次のように表明されている。

なお、古歌・古文を解釈批評する場合に役立つ語学書・文法書の類を紹介すれば際限がないが、本書の著述に際しては近世中期の富士谷成章の『あゆひ抄』と『かざし抄』、¹⁴時枝誠記の『日本文法 文語篇』(昭二九)などを参考す

ることがいちばん多かった。(以下略)

そこで、その頭注にこの表現のこの働きがどう取り扱われているかが関心事となっていた。直ちにそれと見て取れた用例は、ク活用形容詞連用形に係助詞「も」が付いて、その文末が終助詞「か」「かな」となっている用例だった。ここは、全集本から引くこととする。

(17) とどむべきものとはなしにはかなくも散る花ごとにとくふ心か(古今・2二二二)

(18) をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥よなこどりかな(古今・1二二九)

右二首とも、提示された主観的情意表現に続いて、その対象が詠嘆の終助詞「か」「かな」を伴って述べられている。用例(17)の初句第二句「とどむべきものとはなしに」は接続部と見てよいか。第三句でも、「はかなくも」は文頭に等しく、主観的情意を提示していて、あえて独立部として理解したい。用例(18)の上の句の三句は、場面を紹介する補充部である。第四句ではあるが、主観的情意を提示していて、その対象が第五句に詠嘆の終助詞「かな」を伴って応じている。

そこに、全集は、どう施注しているか。用例(17)について、「はかなくも」は「散る花ごとにとくふ」を修飾する。「も」とい

う助詞がつくと次の句全体を修飾する。」とある。用例(18)については、「心もとなくも。不安そうに。」という訳語の後、「鳥の鳴き声が作者を不安がらせるのである。」といっている。その「作者を不安がらせる」は、時枝の主体・客体で読み分ける姿勢を受けているといえよう。もちろん、さらにいえば、あの「苦しくも」が「我が苦しくも」の意であるといっているのを受け、「我がはかなくも」「我がおぼつかなくも」である、といってほしいともいいたくなる。その点、「も」を伴わない用例としての三十四番歌は、直ちにそれとわかる訳語だった。

(19) やどちかく梅の花うゑじあぢきなく待つ人の香にあやまれり、(古今・1三四)

初句第二句で一文である。そこで、文頭の「あぢきなく」で、文末は詠嘆の「けり」である。全集頭注に「不都合にも。困ったことには。この句は第四、五句の全体を修飾する。」とあって、訳語は最適である。新全集も、全く同じである。全集が「待つ人の香にあやまれれる、あぢきなし。」にして、それを現代語訳しているのに対して、新全集は、「あぢきなく」をそのままの位置で「せんないことだが、」と訳している。接続助詞「が」を借りての、この表現の現代語訳である。大系(佐伯梅友・昭和三十三年(1958)年)は、「私がつまらなく感じることに。」

とあって、時枝の単元八とも、あの I 老教諭とも重なる訳出であった。ただ、新大系(小島憲之・新井栄蔵・平成元(1989年)の「まつ・あやまたれけり」両者にかかる。」は、先人たちの旧注が読みとれていないのではないかと、思えてくるが、いかがであろう。そもそも、この表現のこの働きを修飾機能と見ることに無理があると思えるのである。

そうではあっても、この表現のこの働きに、多くの先学がアプローチを試みていたのである。

十三 橘「古今集五註拾遺」の「あぢきなく」の解

国語科教諭として三高校に十五年勤務し、その後も非常勤で高校国語科に出講していた筆者には、国語解釈学会誌「国語解釈」(昭和十一(1936)年から昭和十五(1940)年まで)¹⁵⁾に、いつか通読してみたい思い強く、「国語解釈」復刻版全三巻(教育出版センター発行・二十一万円)を、平成五、六年のころか、購入した。そのようにして出会った橘純一執筆「古今集五註拾遺」である。その二月創刊号に、いま取り上げていくこの表現についてのちよつと長めの注記が見られた。

あぢきなくの解

(遠鏡)ムヤクナコト、ヂヤニ、庭ノ近イ所ニ梅ハウエマイゾ。(評釈) 来もせぬ待ち人の袖の匂に、つまらなく、間違へられたわい。

右に示した遠鏡の訳によると、宣長翁は、上の句のうちで、「あぢきなく」といふ副詞が倒置されたものと考へて、上に旋して訳したのかも知れぬが、もしさうならば誤で、此の第三句は、このまゝで正常な位置を占めてゐるのである。而して、「あぢきなく」「かたじけなく」などの副詞は、甚だ屢々、そのまゝの形で、「あぢきなくも」「かたじけなくも」の意に用ゐられ、こゝもその例である。故に「あぢきなくもあやまたれけり」として解すべく、「おほつかなくも呼ぶ子鳥かな」(古今集二九)、「うれしくも遇ひ申したるかな」(大鏡序)の如き用例を参照すると、この副詞の意は下文全体に係つて、アヤマタレテ、アヂキナイの意になる。単に「あぢきなくあやまたる」と、下の用言だけを修飾するのではない。この関係は、「も」を伴ふ副詞の下に来る述語が、「かな」の如き感動助詞で終る場合に於て、特に著しい。この歌では、終結助動詞「けり」が、過去の助動詞といふよりは、「かな」などに相当する詠嘆の役目をなして居るのである。尤も、詠嘆で結んでなくと

も、かの源氏桐壺に、桐壺更衣の事を叙して、「やうく天の下にも、あぢきなく、人のもてなやみ草になりて」とある如き、やはり「人々ノ噂ノ種ニナツテ、マコトニ迷惑、千、万、ナ、ワ、ケ、デ」といふ意である。諸注は、此の「あぢきなく」が「あぢきなくも」の代用である事、及び副詞が「も」を伴ふとき修飾範囲が拡大する事について、判然たる理解を有してゐない。(46ページ上・下)

その「あぢきなく」は、五か月後の「国語解釈」七月号の「古今集五註拾遺」に再び登場する。素性の「四三番歌」「ほと、ぎす初声きけばあぢきなくぬし定まらぬ恋せらるはた」の「あぢきなく」である。【訳】「時鳥の初声を聞くと(あぢきなく^{訳ス}、そゝろに感情が揺いて誰といつて相手もはつきりせぬ心地がせられて、閉口^{うづ}だわい。はてさて、(どうしたわけか、思へば我ながらばか^くしい)」に続く解は、次のように述べられる。

此の語は、既に創刊号所載の本稿「宿ちかく梅の花うゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり」(三四)の歌について述べた通り、「あぢきなくも」の意に解すべき例である。よつて、これを「…恋心地がせられて閉口^{うづ}だわい」と、下に旋らして訳した。これを

(遠鏡)「無益^{むやく}ナ…恋ゴ、チカスル」

(評釈)「さし当つてつまらなく、…恋心地がされるわ」など訳してあるのは、「あぢきなくも」と「も」を添へて解することに心づかぬ訳である。尚、創刊号四六頁参照。(29ページ上・下)

以上の二解に、橘のこの表現についての姿勢は明らかである。そこにいる「副詞」は、現行の一般としては形容詞連用形だが、その形容詞連用形の下には「も」を添えて解する姿勢を鮮明にしている。後続する表現全体を修飾するという解釈は、連用形という活用形からはそう説明してしまうことも止むを得ないであろうが、「閉口^{うづ}だわい」という訳出からは、その表現のその働きは、どう感じ取つたらよいのであろうか。

十四 主観的情意述語の独立語化による提示表現

用例(8)として引いた、その一首の「呼子鳥」は「よぶ子鳥」で、その「呼ぶ」と「呼子鳥」の「呼」との掛詞である。そこで、その一首を詠者が発想したときの、その対象が、「をちこちのたづきも知らぬ山中に呼ぶ呼子鳥」だったろうと見えてきた。続いて、その一首が、「をちこちのたづきも知らぬ山中に呼ぶ呼子鳥(の声)、おぼつかなし。」という述体の文⁽¹⁶⁾だったろうと

も思えてきた。その「おほつかなし」を、「……かな」とい
う詠嘆表現形式に嵌め込むと、「をちこちのたづきも知らぬ山
中に呼ぶ呼子鳥（の声）のおほつかなくもあるかな。」となる
であろう。三十一文字という律文の制限から、止むなく補助語
「あるかな」を省略割愛して、被補助語「おほつかなくも」だ
けを第四句に投げ入れるように収めたのである。

右に見た表現の推移の過程は、用例(1)の「苦しくも」歌にも
当て嵌めることができたのである。「苦しくも降り来る雨か」も、
詠者が認識した対象は、「降り来る雨」である。その述体の文は、
「降り来る雨、苦し。」であろうと見えてくる。そこに、詠嘆
表現形式「……も……か」が配されると、述体の文は、「降り来る
雨の苦しくもあるか。」となるであろう。その詠嘆表現形式が
強く意識されていたからであろうか、文頭に被補助語「苦しく
も」だけが提示されても、その「……も……か」の「……か」が期待
されて、その対象としての「降り来る雨」が、補助語でもない
のにここに収まってしまったのである。万葉歌のいま一用例の
二四五番歌の「奇しくも神さびをるかこれの水鳥」も、この推
論が適用できる。古今集歌の何首かも、竹取や大鏡の、小稲用
例の(2)も(3)も、すべてこの推論をもって説明できた。五十数年
前から、いや六十年ほど前から感じていたように、いま思えて

くるのである。

文末が定位置となつている述体の文の述語が待ちきれなかつた
のであろうか、その補助・被補助の関係を借りて、被補助語
だけを文頭やそれに準じる位置に提示する表現が生みだされ
た。文の成分としては、橋本進吉『新文典別記』にいう独立語
に含めて取り扱えようか。連用修飾の修飾語はもろろん、補充
成分として分立された修飾語も、さらには接続語も独立語も、
それらすべてに、述語が応じるのが日本語文である。先人たちが、
この表現についていう「修飾」は、近年いうところの修飾
ではなく、独立語と述語との関係あたりにこそ相当しよう。

文頭やそれに準じる位置に提示するといったのは、これも、
独立語という文の成分名を『新文典別記』に拠ったところから、
その『新文典別記』の解説に倣ったに過ぎない。碁石のいう「標
示」のほうが、その姿勢をよく表していると思う用例もあつて、
平生は「主観標示」と呼んでいることのほうが多いかとも思え
てくる。

上代から中古にかけて、この表現は、情意を表すシク活用形
容詞連用形が「も」を伴って現れ、次いで、ク活用形容詞連用
形が「も」を伴う用例をも見せるようになった。中古には、い
つか、「も」を伴わない形態にも類似の機能の用例が見られる

ようになった。さらには、形容詞連用形に準じて、ナリ活用形
 容動詞連用形が「も」を伴って現れてもくる。副詞の一部も、
 いくつか類似の機能を担うようになっていた。この形態の多様化
 は、何を意味するのであろうか。

近現代語に見る「惜しいことに」「幸せなことに」「弱ったこ
 とに」の「ことに」であるが、その「に」は「として」に言い
 換えられる資格の格助詞で、それら「…ことに」は、文の成分
 としては補充成分ということになる。その成立についての研究
 が期待されるが、「惜しいことだ」「幸せなことだ」という感動・
 詠嘆表現からの提示表現化かとも感じている。「…ことだ」が
 あつての「…ことに」である。

これら多様な形態のこの表現は、とにかく広い意味での連用
 成分である。独立語も、その連用成分に含まれる。ただ、初学
 者は、この表現の働きについていう「修飾」に悩まされる。あ
 えて擬似連用成分といって、直ちに直下の動詞を修飾しない点
 から、この表現を捉えさせたいと思っている。

注

(1) 千葉県立佐原第一高等学校に昭和三十五年度在勤の三教諭である。I

(2) (石橋猛) 教諭は、同校前身の旧制中学校出身の地元の方で、この後、
 間もなく停年退職された。K(清島亮三) 教諭は、京城帝国大学での
 時枝誠記の教え子で、福島県立高校から転動してきて、その後、学習
 院高等科に転入された。千葉大学の太岩正伸教授と同期と聞いていた。
 S(関恒延) 教諭は、東京教育大学での佐伯梅友の教え子で、同県立
 木更津第一高校で三年勤務の後、筆者と同年の昭和三十一年度に着任
 された。後に、指導主事、また、複数校での教頭を経て、その県立佐
 原高校(校名変更)校長となり、退職後も県内教育行政に携わり、大
 学講師も務められた。『海人の刈藻全訳注語句総索引』(石文書院・平
 成三(1991)年)、『風に紅葉依拠物語・本文・総索引』(教育出版・
 平成十一(1999)年)などの著作がある。平成二十年に死去され
 るまで、ご交誼くださった。なお、その年度の国語科には、非常勤三
 名を別にして教諭九名が在職していた。また、本歌取りの「駒とめて」
 歌を載せていた教科書は、尚学図書版であつたろうか。

(3) 時枝誠記『古典解釈のための日本文法』(至文堂・昭和二十五(1950)
 年)。当時は、受験参考書として認識されてもいたと思う。なお、古
 典解釈のための日本文法増訂版(至文堂・昭和三十四(1959)年)
 には、その一首の後に以下のような解説が加えられている。

「苦しくも」は、前例と同様に、「我が苦しくも」の意である。こ
 の場合、もし、「はげしくも降り来る雨か」と表現したとすれば、こ
 の「はげしく」は、「降り来る」を修飾したことになって、本
 例とは別の構造になる。

(4) 三谷栄一『竹取物語評解』(有精堂・昭和二十三(1948)年)。こ
 の表現のこの動きを「まあ」と訳すことについて大きな印象を受けた
 が、教場でいえるようになるまでには、長い時間を要したように思う。
 橘純一・慶野正次〔文法編〕『大鏡通釈』(武蔵野書院・昭和三十三年(1958)
 年)。その後、十年以上経って、橘純一『大鏡新講』(武蔵野書院・昭

- 和二十九(1954)年)で、その表現の通釈を確かめた日があった。さらに、その後、同上書が瑞穂書院から刊行されたことを知る。
- (5) 北原保雄『表現文法の方法』(大修館書店・平成八(1996)年。同上書に至るまでに、その北原保雄の著作として、日本語の世界6『日本語の文法』(中央公論社・昭和五十六(1981)年)／『文法的に考える―日本語の表現と文法―』(大修館書店・昭和五十九(1984)年)／『日本語の焦点』(教育出版・昭和五十九(1984)年)などから、その都度、この表現のこの働きについて、認識を深めることができた。
- (6) 時枝誠記『増淵恒吉』『古典の解釈文法』(至文堂・昭和二十八(1953)年)。同上書に出会う機会を逸して、その五版(昭和三十一年(1956)年)をさらに十数年遅れて読むことになった。それまで放置してあった時枝『国語学原論』(岩波書店・昭和十六(1941)年)／二十五刷(昭和四十五(1970)年)などを開く契機ともなった。北原の著作のなかに増淵の名まえがあつて惹かれたのも、その時枝との共著であった。
- (7) 渡辺実『国語構文論』(瑞書房・昭和四十六(1971)年)。注(6)に引いた時枝・増淵『古典の解釈文法』の当初の企画に、この渡辺も参加していたことを時枝の序から知った。その渡辺の理論を増淵が教育現場に取り入れ、読解指導に可能と知って、途端に誘導成分が見えてきたものようである。
- (8) 中村幸弘・碁石雅利『古典文の構造』(石文書院・平成六(1994)年)。
- (9) 坂梨隆三『副詞』(北原保雄・鈴木丹士郎・武田孝・増淵恒吉・山口佳紀編『日本文法事典』(有精堂・昭和五十六(1981)年)の第五章「自立語」のうちの一項目担当執筆者。そこに「もちろん」幸い「あいにく」などを取り立て、《注釈副詞》としたうえで、「評価の副詞」解
- 説副詞」などともしている。北原『日本語の文法』などに拠ったのであろうか。
- (10) 鈴木泰「中古における評価性の連用修飾について」(明治書院『日本語学』昭和五十八(1983)年)。
- (11) 中村幸弘・碁石雅利『古典語の構文』(おうふう・平成十二(2000)年)。その後、『日本古典・文・和歌・文章の構造』(新典社・平成二十四(2012)年)においても、この表現のこの働きを取り立てるが、その働きをいう呼称等に変わりはない。
- (12) 小田勝『古典文法詳説』(おうふう・平成二十二(2010)年)。その後、若干増補して『新編古典文法総覧』(和泉書院・平成二十七(2015)年)として刊行し、この表現について、形態のうえで異なる二形を発掘し、紹介している。
- (13) 小沢正夫校注・訳『古今和歌集』(日本古典文学全集・小学館・昭和四十六(1971)年)。
- (14) 橋純一主幹『国語解釈』(瑞穂書院・昭和十一(1936)年から昭和十五(1940)年まで刊行された原則月刊の国語解釈学会誌)会員の多くは、当時の旧制中学校国語科教員だったが、その教員になるための文検受験の参考雑誌でもあった。I老教論も、その読者であったかと思っている。
- (15) 『古今集五註拾遺』は、橋の連載講座で、『古今和歌集』歌のなかの問題ある箇所を取り立て、契沖の『古今余材抄』、真淵の『古今集打聽』、宣長の『古今集遠鏡』、景樹の『古今集正義』、金子元臣の『古今集評釈』の諸説を検討して、相應の結論を述べるなどしたもので、難解歌の選択欄といえることができる。
- (16) 山田孝雄『日本文法論』(玉文館・明治四十一(1908)年) 第二部「句論」第三章「句の性質」第二「述体の句」(一二三八ページ)に拠った。

(17)

形容詞連用形に助詞「も」を添えて文末が「か」「かな」などで言い切られる表現の多くが、その「も」と「か」「かも」「かな」との間に補助動詞「あり」の連体形「ある」を用いて、補助・被補助の関係を構成している。小稿の四に(A)として示したところで、「苦しくもあるか」(万葉・七・七七)／「貴くもあるか」(万葉・17・三九二)／「悲しくもあるか」(万葉・19・四二七九)／「嬉しくもあるか」(万葉・19・四二八四)などが、その具体的用例である。小稿の推論のうちの最も大きな論拠の一つとなっている。なお、筆者は、「ばこそあらめ」(國學院雜誌「第七十八卷十一号・昭和五十二(1977)年」)において、被補助語省略による補助動詞「あり」の独り歩きという説明をしたことがある。補助・被補助の関係は、補助語の働きを借りて構成されることから、どちらかを省略しても、それぞれその機能は保ちえたかと思っている。現代語でいうと、「おはようございます」の補助語「ございます」の省略として成った感動詞「おはよう」も、その一例といえよう。

(18)

橋本進吉『新文典別記』(富山房・昭和十(1935)年)第三篇「文の成分」第九章「独立語」(二五七ページ)に拠っている。その独立語を(A)(B)(C)(D)の四項に分け、その(C)を「提示の語」として、「九月一日、私は一生この日を忘れないでせう。」などの例文を挙げている。「私は一生九月一日を忘れないでせう。」の「九月一日」を提示して、本来の一文の「九月一日を」を提示語「九月一日」に言い換えている、と解説している。